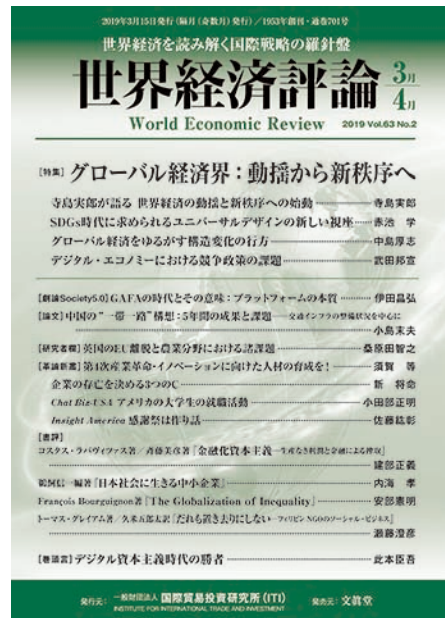


本論文は

世界経済評論 2019年3/4月号

(2019年3月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF



定期購読
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン書店

この文を書くのは感謝祭の日。この日は、豊穡な食べ物を産んでくれる国アメリカに敬虔な感謝を表すため、家族全員が集まって大きなテーブル狭しと盛り上げた料理を賞味する。Norman Rockwell の「The Thanksgiving Picture」はこれをよく描く。テーブルの向こうの端に夫婦が立ち、エプロンをかけた妻が台所から持ってきた出来立ての巨大な七面鳥を載せた皿をテーブルに置こうとしている。後ろには正装の夫がニコニコと立ち、祈祷を終えればすぐ七面鳥の切り分けをする姿勢である。

テーブルの右には女性が3人と男性が1人（母に一番近い顔の見えない人は女性ではなく男性かもしれない。とすれば女2人、男2人）、左には男性3人、女性1人、それに子供が1人いる。皆笑顔。モデルは皆ヴァーモント州アーリントンに住むロックウェルの家族や友達というから、描くのは夫婦の子供と共に兄弟姉妹を含むとの意味合いだろう。皆、白人。絵は写真に撮ったものに基づくという。

野生の七面鳥、今やペスト

ところで、この「感謝祭の絵」は後でつけた題で、初めは「欠乏からの自由 Freedom from Want」と言った。これはロックウェルが1943年、人気のあった絵入り週刊誌 The Saturday Evening Post に出したシリーズの一つで、他に「言論の自由」「宗教の自由」「恐怖からの自由」の3作があった。この4作はルーズベルト大統領が1941年の年頭教書で述べた「4つの自由」を絵で表したものだ。別名を「クリスマスには家にいます I'll Be Home for Christmas」というから、描いたものは特に感謝祭に限ったものではないが、感謝祭というこの絵がまず頭に浮かぶ。

そして感謝祭の日が近づくと、感謝祭に関わる

「神話」すなわち作り話が問題になる。

まず、感謝祭は11月第四木曜日と決まっているが、これは秋の収穫の祭だから、初めは9月の終わりか10月の初めに持った。

次に、感謝祭といえばピルグリムを思い、ピルグリムが先住人のインディアンと最初の秋の収穫を祝うために持った宴を想像する。所はボストン南東のプリマス、時は1621年というが、これも怪しい。この想像が生まれたのは1830年代だった。

そして、ピルグリムといえばピューリタン、ピューリタンといえば皆ツバ広の大きな帽子を被り、衣服は黒一色に大きなバックルを想像するが、それも19世紀の空想で、ピルグリムは初めから皆そんな姿をしていたわけではない。また、ピューリタンといえば厳格な禁欲者を考えるが、それも間違い。機会があれば乱痴気騒ぎもやった。

一体、そもそもピューリタンの概念そのものが間違えている。彼らは宗教迫害を逃れて、純粋な宗教共同体の樹立を新大陸に求めてやってきたわけではなく、一攫千金を求めてやってきたのだ。

場所もおかしい。感謝祭が最初あったのはテキサスのサン・エリザリオで、1598年、スペイン探検者 Juan de Oñate の到着を祝う宴会だった。いや違う、最初はヴァージニアのジェームズ河畔の Berkeley Plantation で、1619年、38名の英国の入植者が未開地に無事に落ちついたのを祝った、などなど意見が分かれる。

そう、七面鳥も間違い。当時の日記などからすれば、宴の主体となったのは鹿肉だった。狩猟して食った鳥も七面鳥ではなかった。野生の七面鳥は敏感かつ敏捷であり、鉄砲でも撃つのが難しい（と言ったのは、狩猟家のカーター大統領である。1960年代ジョージア知事として、カーターが当時絶滅に近かった野生の七面鳥を保護した。それが大きく成功し、今や全国中に増え、これをペス

トと呼ぶ町すらある)。

昨今食卓に供される七面鳥は、一度に何万匹も孵化され巨大な納屋で食い物を詰め込められて、大きな箱フグのように変形させられた化け物だ。

そして、秋の収穫の祭といえば、別にアメリカ独特のものではなく、多数の文化でも同じようなことをやる。例えば日本では新嘗祭がある（というのは、ぼくの追加）。

白頭鷲と七面鳥

そういう「神話」はどの国の祭にも指摘できようが、アメリカと七面鳥には、もう一つ話がある。

アメリカ建国の父の一人 Benjamin Franklin は、国の紋章として白頭鷲 (bald eagle) の代わりに七面鳥を考えた、という。これを初めて知った時、ぼくはなんとという乙なことを考えたのだろうと感心したものだ。この野人そのもののおじさんは、ヨーロッパの王室の紋章にある獰猛な動物を毛嫌い、剽軽な七面鳥を選んだ。さすがだ。

ところが、学校で教えるというこの話も正確ではない。

第一、最初に国の紋章を検討する 1776 年の委員会に John Adams や Thomas Jefferson などと出席したフランクリンが考えたデザインには白頭鷲も七面鳥も出ず、聖書の話に基づくものだった。1780 年と 1782 年にも紋章を検討する委員会があったが、フランクリンはどちらにも出なかった。1782 年にはフランクリンはパリにいて、パリの貴婦人たちといちゃついていた。

フランクリンが七面鳥に触れるのは、それから 2 年後の 1784 年で、独立戦争参加将校の親睦会を作ろうとした時にフランクリンが娘に書いた手紙に出てくる。そこで、親睦会が選んだデザインにある白頭鷲の絵は下手で、「Dindon つまり七面

鳥に似すぎている」と書いて、「しかし、私なら白頭鷲は我が国の代表としてなってもらいたくない。白頭鷲はタチの悪い鳥で、雉鳩など他の鳥がとった魚を盗み、しかも臆病の極み。それに比べると七面鳥はもっと立派で、アメリカ土着のものとして相応しい」と続く。

当世風の感謝祭

ともかく、ロックウェルの「感謝祭の絵」は有名になった。そのため多くのパロディや現代風の描き換えが生まれた。最近の例を The New York Times が 2018 年 11 月 8 日の Reimagining Norman Rockwell's America と題する記事に選んだものに求めると、これには「欠乏の自由」の他に残りの三つの「自由」も含む。全て写真による再現である。

「欠乏の自由」をやったのは Hank Willis Thomas という黒人の概念芸術家で、写真家 Emily Shur との共作。まず、ロックウェルと違い、描かれる人たちは白人ばかりではない。ロックウェルの絵で女主人に相当する人は黒人男性で、エプロンの代わりに革ジャンパーを来ている。それが差し出すのは七面鳥ではなく、出来立てと思しきパンの一塊である。ロックウェルで男主人に相当するのはドレッドロックスをした女性で、この女性は肌色からすればヒスパニックだろうか。テーブルの左右に着く白人はゲイ・カップル、レズビアン・カップルを含むのかもしれない。

概念芸術家トマスと写真家シャーは他にも「欠乏からの自由」の写真を作っている。そこには、写っている人たちが立場を変え、パンの一塊も七面鳥にするものもある。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在 NY